

# 金沢大学馬術部創部70周年記念式典挨拶

著者	柴田 正良
著者別表示	Shibata Masayoshi
発行年	2019-10-13
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00056171">http://hdl.handle.net/2297/00056171</a>



## 金沢大学馬術部創部70周年記念式典のご挨拶

令和元年10月13日  
金沢大学教育担当理事・副学長  
柴田正良

ただ今ご紹介に与りました、教育担当の理事・副学長の柴田です。

本来なれば、創部70周年という輝かしいこの席には学長の山崎光悦が出席しご挨拶を述べるべきところですが、所用により叶いませんでした。まず、そのことをわび申し上げます。

先ほどの岡島会長のご挨拶にありましたように、この度の台風19号により日本列島は多くの被害に見舞われました。この場をお借りして、亡くなられた方のご冥福とともに、怪我をされた方の一日も早いご回復をお祈り申し上げます。

さて、本日は、金沢大学馬術部白蹄会の創部70周年を記念しての式典と承っておりますが、まず何よりも、本学馬術部がかくも長きにわたって活動を続けられてきたことに敬意を表するとともに、心よりのお祝いを申し上げます。

台風が来るような時、馬たちと部員の皆さんはどうしているのだろうと、昨日昨夜は、私も心配してずっと空を見上げておりました。

生きものである馬の昼夜にわたる世話は、犬や猫とは比べものにならないほどの難事業であり、しかも、えさや夏冬の健康管理など、随分とお金がかかることだと思います。昔は先輩の農家にわらを貰いに行ったなどの苦労話もあったやに聞いております。おそらく今も、在学生の頑張りはもちろん、先輩卒業生の皆様方が本馬術部を力強く支えておられるものと思います。先輩諸氏のこうした長年の御援助に、改めて感謝申し上げます次第です。

先日、馬術部の方から、70年の馬術部の歴史を綴ったこの冊子、『金沢大学馬術部70年の歴史』白蹄会、というのを頂きました。つらつら眼を通しますと、誠によく書かれた記録誌でありまして、馬術とは縁遠い私にも、その成り立ちと現状がつぶさに伝わって参りました。

実は、以前から、本馬術部で飼われた馬たちは最後はどうなるんだろうと思っていましたが、この冊子の中の「愛馬の碑」のところようやくその一端が分かりま

した。それに依りますと、あちらの方にある「愛馬の碑」は、昭和17年に、3頭飼われていたうちの1頭「良川（よしかわ）号」が亡くなった時に、その死を痛んだ馬術部員たちが、小立野の金沢高等工業学校にあった厩舎の傍らに建立したもののようです。

しかし、その後、厩舎や馬場が移転を繰り返す中で、いつしかこの碑は忘れ去られ、気づいた時は、まさに「ブルドーザの手が迫ろうとしていた矢先」でした。それを偶然、目にした騎友会の塚本氏の獅子奮迅の働きで、この碑は昭和44年6月に無事、平和町に移転しました。冊子の23ページには、こう書かれています。「『愛馬の碑』は危機一髪のところまで消滅（歴史からの抹殺）を免れたのです」、と。こちら辺の記述は、緊迫した場面を彷彿とさせる名文でした。

ところで、私は教員担当という立場上、学生さんたちの事件や事故の報告もすべて受けることになっています。それで思い出されるのは、つい先日、馬術部の部員が2名、確か七尾市の小学校で馬術のデモンストレーションを行っていた時に、馬の脚に自分の足を踏まれて骨折したというニュースです。

まだその傷は癒えていないでしょうね？

そんなことで皆さんは馬を嫌いになったりはしないのでしょうか、やっぱり馬を扱うのは大変だろうなあ、と改めて思った次第です。

では、最後に、ここにお集まりの皆様方とすべての馬術部の先輩の皆様方、それから、とくにケガをされたその2名の方のご健勝・ご健康を祈念して、私からの挨拶とさせていただきます。

本日は誠におめでとうございました。